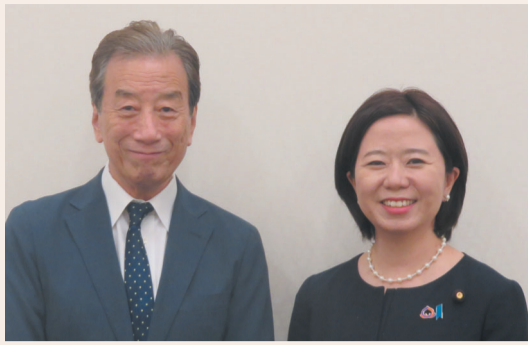


# 日本の次世代のために大切なこと 自分は何がしたいか Passion そして Action

## 参議院議員 自見はなこ

日本医療政策機構 代表理事

## 政策研究大学院大学 名誉教授 黒川清



黒川清

自見はなこ

参議院議員の自見はなこ先生は東海大学医学部の出身、黒川清先生は東海大学の医学部部長をされておられた時期もあり、現在は日本医療政策機構の代表理事をされておられます。お二人とも非常に行動的で目覚ましい活躍をされていますが、どのような接点があり、日本の医療政策に対して、どのようなお考えをお持ちでしょうか。参議院議員会館でお話を伺いました。(10月14日取材)

—— お二人の出会いから教えてくださいませんか。

自見 私は筑波大学の国際関係学類

を卒業した後に医師になりたいと思い、東海大学の医学部の3年次に学士入学しました。当時は4年間で医学部を卒業できるプログラムがあったのですが、その時の医学部長が黒川清先生でした。東海大学には現代文明論というコアカリキュラムがあり、本来であれば本校へ行って聴講すべきものだったのですが、学士入学をした約15人は、この授業を受けることに関して黒川先生のご講義で代替できないか交渉し、10数回の特別授業を組んでいただきました。黒川先生はご高名でしたので、せっかくでしたら先生とのディスカッションなどをしてほしいと考えたのです。テーマは毎回異なりましたが特に「生命倫理」や「体外受精」の話は印象に残っています。「医学部教育は今後どうあるべきか」といった話や「医療制度」の話もありました。全体としては「医療の周りの社会学」という授業だったと思います。

アメリカの医学部は最初普通の大学に4年行きます。そのあとに医学部はさらに4年間の教育があります。私は東京大学大学院で医学博士を取ったあと、1969年にアメリカに渡り、当初はペンシルベニア大学の医学部で助手を務め、その後カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)の医学部に移り、上級研究員や助教授を務めました。南カリフォルニア大学の医学部で準教授を一時務め、UCLAに再び戻り、医学部の準教授や教授を務め、計14年、アメリカで暮らしていました。プール付きの家も持ち、日本に帰るつもりはなかったのですが、どうしても東京大学の助教授として帰ってくるように懇願され、1983年帰国しました。そして1996年、定年まで約1年を残して東海大学医学部に移りました。その時に学生だったのが自見さんでした。

自見 黒川先生はグローバルな視点をお持ちで学生にとって非常に魅力的でした。東海大学の医学部改革にも率先して取り組まれましたね。

黒川 あの頃は世界的に医学部が変わり始めていました。ネットが普及して隠すことができない時代になってきたこと、訴訟問題が多くなりかつ高額になってきたこと等々、インフォームドコンセントの書き方等をはじめ、多くのことが大きく変わってきた時期でした。

黒川 この授業は1冊の本にまとめて『医学生のお勉強「クレイジー」な国ニッポンを理解しよう』というタイトルで2002年5月に出版されました。

自見 東海大学でも黒川先生のおかげで、他大学に先駆けてPBL(Person Based Learning)という、縦割りの臓器ごとではなく、症例ごとに紐解いていく勉強のスタイルが定着していました。クリニカル・クラッシュ(Clinical clerkship)／従来の見学型臨床実習ではなく、学生が医療チームの一員として実際の診療に参加し、より実践的な臨床能力を身に付ける臨床参加型実習を導入してくださったのも黒川先生です。非常に良いアメリカの医学部教育を受けることができました。あの頃、東海大学医学部は一歩先んじていましたから全国の医学部の憧れの的で、生き生きしていました。素晴らしい仲間、素晴らしい母校です。4年間黒川先生の下で学ぶことができて本当に良かったと思っています。

黒川 東京大学も定年まであと1年余り、次はどこで仕事をしようかという時に考えたのは、やはり自分は「教育」がしたいということでした。そんな時に東海大学から医学部長にお声かけいただいたのです。東海大学では医学部教育を変えようとしていて、それが分かっていましたのでお引き受けすることにしました。

自見 ジェネラリストから、ということですね。総合内科も早い時期から立ち上げていただきました。診断がつかない内科の疾患を取り扱う部門には、外国で研鑽を積んだ先生方が来られていて、すごく刺激になりました。

黒川 それまでの初期研修は、多くが卒業した大学でそのまま研修をしていましたが、別の大学や病院を回ることで、自分たちの良いところ、他所の良いところ、自分たちの足りないところが見えてくるものです。専門医とはどういうものかという定義も作りました。

黒川 東海大学は6年くらいおられて、その後日本医療政策機構を立ち上げられたのでしょうか。

黒川 東海大学のあとは、東京大学先端科学技術研究センターに3年、日本学術会議会長も務め、国立大学政策研究大学院大学の教授も務め、NPO法人日本医療政策機構も作りました。

自見 日本医療政策機構はいわゆるシンクタンクです。政策を分析したり政策の提案をしたりするところですが、日本にはあまりありません。国の出資などは受けずに独立系でないと意味がないので、2、3人で始めました。一般的には、すぐに政府に提言をしようとするのですが、まず政府がしていることを分析しなくてはなりません。世界と比較することも大事です。世界的にはシンクタンクは増えていて、Health Policy分野では65くらいあります。

自見 黒川先生のシンクタンクでは政治家を呼んで勉強会を行っています。国会議員への啓発活動に非常に力を入れておられます。国会が立法 Policy Making だからです。Non Medicalの国会議員にも分かるような党派を超えた勉強会を定期的開催していただいています。例えば「これからの社会保障は高齢化が進む中でどうなるのか」といった講義を聞いて、残り30分は皆でディスカッションをします。「精神科の治療はどうなっているか」とか「子宮頸がんのこと」とか、いろいろなテーマで開催していただいている、非常に有益です。同じ言語で国会議員の先生方が医療政策を語ることもできるように、立法府 Policy Making のレベルが上がらないと、いい政策が作れません。行政も自らの殻を自らでは破れない仕組みになっていますから、政治家を動かすことは非常に重要です。

—— コロナの診療報酬の増点に対する補正予算を2兆4千億円組むことができたこと、地方創生臨時交付金

に物価高騰支援のための新たな交付金を6千億円まで増額した件など、自見先生のご尽力が大きかったと伺っています。しかし自見先生のこうしたご努力を一般の人々が知る機会はないかなありませんね。

自見 子宮頸がんワクチンの件もうまく進めることができた典型です。8年前に副反応が表出してワクチン接種が止まりました。しかし年間約2700人の女性が子宮頸がんで亡くなっていることを予防できるワクチンなので、医療関係者は早く再開したいと考えていました。私は議連を作り、多くの国会議員を集めて行政を動かして再開を目指しました。その背景には黒川先生のシンクタンクが議論の土壌を耕してくださっていました。シンクタンクと政治が良い関係だったので、8年間止まっていた子宮頸がんワクチン積極的勧奨が今年の4月から再開されました。

他にも与党でたった1人の小児科医として、液体ミルクの解禁にも漕ぎつきました。

脳卒中・循環器病対策についても、2018年12月に脳卒中・循環器病対策基本法が議員立法で成立し、同法に定める基本計画の策定に際しても超党派の議員連盟を作り、事務局長として議論を重ね、2020年10月に閣議決定されました。

さらに「こども家庭庁」についても、黒川先生のシンクタンクが熱心にシンポジウムをされている「2040年の高齢化社会の医療費をどう社会全体で乗り切っていくのか」につながります。医療費を無駄に使わないことも大事でしょう。全世代型社会保障を完成させるためには「こども」だけがすっぽり抜けています。医療も介護保険も高齢に

なるほど日本の社会保障は手厚いのですが、こども財源はきちんと確保されているわけではありません。日本では中間層が経済的に苦しく、児童手当も削減され、教育費が高んできています。この不安感を取り除いてあげるには財源が必要です。今、私はこども財源の確保に取組んでいます。つまり厚生労働省からこども家庭庁を切り離す作業です。法律的にはこの6月にこども家庭庁設置法案ができたので、来年の4月から新しい省庁としてこども家庭庁が発足することが正式に決まりました。厚生省と切り離したのは、予算を別々にするためです。2040年までの超高齢化、超少子化を乗り切るための手立てです。今のままでは高齢者予算の方は増え、こどものための予算は取れないでしょう。財務省はこどもが減ればそのままこどもの予算を削ります。それではこどもが増えるどころか、もつと少子化が進み、最終的には国が無くなってしまいます。

黒川 立法府の議員の先生方は非常に忙しい。何を尋ねても知っているのです。今、日本では100歳以上の人口が9万人、そのうちの90%が女性です。その60〜70%が認知症と思われ、誰がケアしていますか？そういうことを決めていくのが立法です。立法を成功させるには、いかに多くの議員さんと同じ気持ちにさせて、その方向に持っていくかです。議員さんは立法を担いますが、まず選挙に勝たないとただの人になってしまいますから、地元を回ることも疎かにはできません。

自見 シンクタンクは進むべき方向性を示して、正しい方向に国会議員を導いてくれるものです。非常に大切

だと思えます。

黒川 私は日本の外にいた時間が長かったので、直感的に日本に必要なことが分かります。今、日本が何をしたいのか。日本の中に行くと分かっていくものですね。例えば今、「DX」と騒がしいですが30年遅い。Windowsが入った時点でやっておかなくてはならなかったことです。そういったことを決めるのが立法です。

自見 日本は民主主義ですか？日本はマッカーサーに言われた通りにやってきただけです。日本は今とても良くない。65歳以上が29%を超えています。そして女性がこどもを生みたい雰囲気ではないのです。

明治になった時、福澤諭吉は「これからは英語だ」と言って、米国のまずウエストコーストに行きます。英語の本をたくさん買ってきて、次はヨーロッパにも行きます。そして3回目は米国イーストコーストに行き、やはり本を山ほど買ってくるわけです。そして本を読んで『文明論乃概略』等を著します。今こんなPassionを持った大学の先生がいますか？

自見 確かに第二次大戦後の冷戦で

日本を外から見ると、日本の弱いところが見えてきます。

自見 日本では女性の方が臨機応変です。女性がPolicy Makingした方がうまく行くかもしれません。

黒川 女性は夢を見ても、リアリストですからね。日本の男性はおだてられると調子に乗ってしまう。

自見 しかし日本はジェンダー平等が無すぎますね。女性がまだまだ抑圧されています。

黒川 男性は形にこだわり過ぎる。大事な内容は内容と行動。言うならやればいい。やらないですよ、男性は。その点、女性はやるとなれば頑張るやります。

男性は〇〇銀行に勤めて15年もすれば立派なバンカーです。でも日本では△△銀行に移ることは、ほぼありません。外国では考えられないことです。元はと言えば、徳川時代に完成したタテ社会を引き継いだのでしょうか。

自見 確かに第二次大戦後の冷戦で

日本はラッキーに成長することができました。自分たちの力で国力を増やしたわけはありません。

黒川 戦後は米ソ冷戦・民主主義と共産主義の対立でした。ドイツは半分に1つになるのにほぼ30年かかりました。日本が引き上げたあの朝鮮半島でもバトルが起き、一番酷い目にあつたのは朝鮮の人たちです。未だに北と南に家族が分かれていて、会うことができない人たちがいます。

日本にいると当たり前のこと。企業から企業に転職できない、1つの企業にずっといるおじさんたちは外から見るとなんだか不思議です。国会議員にしても主な民主主義の24カ国で、日本ほど二世議員が多いのは、フィリピン、タイ、アイスランドに続いて4番目です。何故なのでしょう？

「何でだろう」と知りたくなったことを調べることがとても大事です。知りたいことを調べると頭に入ります。例えばハーバードにもケンブリッジにも入試はありません。理系、文系に分かれてもいません。どうして？ 東大に入った人の才能はクイズです。そうい

入った人の才能はクイズです。そうい

う入試だからです。これも日本にいては感じにくいことですね。

政策研究大学院大学というのは、どういった大学ですか？

黒川 2022年5月1日現在の在校生は、修士課程、博士課程合わせて363人です。うち留学生は6割、日本人は4割です。途上国から来ている人が多いですが、これまで在籍していた留学生の中には、帰国後、大臣、中央銀行総裁に就任した学生も多くなります。政策研究大学院大学の存在意義は非常に大きいと思います。

最後に一言お願いします。

黒川 (人は)自分のしたいことを見つけた時、それに向かって頑張るものです。何をしたいかという、目的に向かうPassionが大事です。まだ気が付いてなくても何かしたいことがあるはずで、そのためには、いろいろな国の将来のエリートと共に学ぶこととは大切です。国を思う心、次の世代のための国を思う心が大切です。

- ◆自見 英子 (はなこ) プロフィール
- 長崎県佐世保市生まれ、福岡県北九州市育ち
  - 1988年3月 福岡県北九州市立霧丘小学校
  - 1991年3月 明治学園中学校
  - 1994年 ブルックライン高等学校 (アメリカ合衆国マサチューセッツ州ブルックライン)
  - 1998年8月 筑波大学第三学群(現・社会・国際学群)国際関係学類
  - 2004年3月 東海大学医学部卒業
  - 卒業後、東海大学医学部付属病院初期研修医
  - 2006年 池上総合病院内科後期研修医
  - 2007年 東京大学医学部小児科入局・同附属病院小児科勤務
  - 2008年 青梅市立総合病院小児科
  - 2009年 虎の門病院小児科～現在(非常勤)
  - 2016年7月 参議院議員選挙比例区(全国区)で初当選
  - 参議院厚生労働委員会理事、自民党厚生労働部会副会長などを歴任
  - 2018年5月 超党派「成育医療等基本法成立に向けた議員連盟」(現「成育基本法推進議員連盟」)事務局長
  - 2019年9月 第4次安倍第2次改造内閣で厚生労働大臣政務官に就任
  - 2020年1月 「新型コロナウイルスに関連した感染症対策に関する厚生労働省対策推進本部」本部長代理に就任
  - 2021年2月 「こども家庭庁」創設を目指す自民党若手有志の勉強会「Children Firstの子どもも行政のあり方勉強会」を山田太郎参議院議員と立ち上げ
  - 同年10月 自民党女性局長就任
  - 2022年7月 第26回参議院議員通常選挙で、自民党比例代表、再選
  - 2022年8月 第2次岸田改造内閣にて内閣府大臣政務官に就任

- ◆黒川 清 プロフィール
- 1936年 誕生
  - 1952年 成蹊中学校卒業
  - 1955年 成蹊高等学校卒業
  - 1962年 東京大学医学部卒業
  - 1962年 東京大学医学部附属病院インターン勤務
  - 1967年 医学博士号取得。題は「腹膜灌流法の病態生理学的研究」
  - 1969年 ペンシルベニア大学医学部助手
  - 1971年 カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部上級研究員
  - 1973年 カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部助教授
  - 1974年 南カリフォルニア大学医学部準教授
  - 1977年 カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部準教授
  - 1979年 カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部教授
  - 1983年 東京大学医学部助教授
  - 1989年 東京大学医学部教授
  - 1996年 東海大学医学部教授
  - 1996年 東海大学医学部学部長
  - 1997年 東京大学名誉教授
  - 2002年 東海大学総合医学研究所所長
  - 2003年 日本学術会議会長
  - 2003年 内閣府総合科学技術会議議員
  - 2004年 東京大学先端科学技術研究センター客員教授
  - 2004年 東海大学総合科学技術研究所教授
  - 2005年 日本医療政策機構代表
  - 2006年 内閣官房内閣特別顧問
  - 2006年 政策研究大学院大学政策研究科教授
  - 2009年 政策研究大学院大学アカデミックフェロー
  - 2011年 東京電力福島原子力発電所事故調査委員会委員長
  - 2013年 内閣官房健康・医療戦略室健康・医療戦略参与
  - 2014年 政策研究大学院大学客員教授
  - 2017年 政策研究大学院大学名誉教授
  - 2019年 東海大学特別栄誉教授
  - 2019年 政策研究大学院大学政策研究院参与、シニアフェロー
  - 2019年 成蹊学園理事長顧問
  - 2019年 広島大学特別顧問
  - 2021年 成蹊学園名誉理事